

季節風

『故郷忘じがたく候』 ぼう

情報広報部長 中川 俊男

北朝鮮による日本人拉致問題を巡って平壤で11月9日から開かれた日朝実務者協議の調査結果は、無事を願う拉致被害者家族の期待を裏切った。

拉致被害者家族会の記者会見をテレビで見につけ、長い年月を過酷な運命に翻弄され続けてきた被害者とその家族がどのような思いでいるのだろうかと胸が痛む。

この拉致事件のニュースに接している中、最近1冊の文庫本が復刊された。司馬遼太郎著の『故郷忘じがたく候』(文春文庫)である。皮肉にもその内容は、朝鮮から日本へ拉致・連行されてきた人々の歴史である。その人々とは、今から400年以上前の1597年、秀吉の朝鮮侵略の時に、朝鮮南原(ナモン)城で拉致され薩摩の領主島津義弘によって日本へ連れて来られた朝鮮の義勇兵ら男女70名で、現在の鹿児島島の薩摩焼の祖先となった陶工たちである。異郷の地で帰化させられ、武士同様に礼遇されても、かれらは姓を変えず、故郷への想いを子孫に語り継いだ。製陶を営み続け、李朝の白磁とは異なるまったく独自の白陶を作り出し、世に言う「白薩摩」を生み出した。代々、沈寿官(チン・ジュカン)を名乗るその子孫は、今なお14代目として鹿児島で薩摩焼の窯元「寿官陶苑」を受け継いでいる。

この本では、朝鮮から連れて来られた陶工たちが鹿児島市近くの朝鮮へ続く東シナ海を望むことができる苗代川(現、美山村)に集落を構えることになるいきさつや、薩摩焼きの伝統、そして14代沈寿官氏やその一族が受けた差別と苦悩の歴史

が綴られている。

14代沈寿官氏は、旧制中学に入学した登校初日、「クラスに朝鮮人が居る」と上級生数人からリンチをうけた。かれらが帰化し4世紀もの時間を経てもなお、韓姓ということで受ける差別と屈辱が少年に与えた精神的な苦痛や葛藤は計りしれないものがあつたであろう。「(抜粋)少年はときどき気を失いかけたが、渾身の力で泣くまいと努めた。日本人は強いという。泣けば日本人でなくなりそうであつた。」その日着たばかりの制服を鼻血で血まみれにして帰宅する少年を、両親と普段は厳格な祖父の13代沈寿官翁が、このような事態をまるで予見していたかのように門のそばに立って待っていた。実は、少年の父親も中学入学時に同じ仕打ちをうけていたのだ。もう二度とあのような学校には行きたくないと言う少年に、父親は勉強でも一番になれ、喧嘩でも一番になれ、いじめれば向こうはかさにかかってくる。お前には朝鮮貴族の勇者の血が流れていると励ました。少年はその言葉通りになったが、その日以来、「日本人とは何か」を問い続けたという。

幸いにも、沈少年には励まし温かく見守ってくれる家族がいた。しかし、今なおお安否の知れない拉致被害者たちには心の支えとなってくれる人がいたのだろうか。横田めぐみさんは13歳で拉致された。それもたった一人で。朝鮮語ができるようになったらお母さんのところへ帰してあげると言う言葉を信じて、それが嘘だと判るまでの5年間には必死で勉強した。日朝実務者協議から政府代表団が持ち帰った横田めぐみさんの拉致後早期と思われる写真に、母親の早紀江さんは「めぐみちゃん、こんなところにいたの」と話しかけたという。他に拉致被害者が数百人いることも決して忘れてはならない。

その昔、朝鮮から日本に連行されて来た陶工たちも、北朝鮮へ拉致された被害者も、両者に言えることは、どちらも時の権力者によって過酷な運命を強いられた犠牲者であるということだ。残念だが、400年の歳月を要しても人間は進化していないようだ。拉致のような人権を踏みにじる行為がまかり通ることのない平和な世界はいつ訪れるのであろうか。